

10.3 尤度比検定

n 個の確率変数 X_1, X_2, \dots, X_n は互いに独立で，同じ確率分布 $f(x) \equiv f(x; \theta)$ とする。

尤度関数は，

$$l(\theta) = \prod_{i=1}^n f(x_i; \theta)$$

となる。

θ の制約つき最尤推定量を $\tilde{\theta}$ ，制約無し最尤推定量を $\hat{\theta}$ とする。

制約の数を G 個とする。

$\frac{l(\tilde{\theta})}{l(\hat{\theta})}$ を尤度比と呼ぶ

検定方法 1: 尤度比がある値より小さいときに, 帰無仮説を棄却する。

すなわち,

$$\frac{l(\tilde{\theta})}{l(\hat{\theta})} < c$$

となるときに, 帰無仮説を棄却する。

この場合, 有意水準 (帰無仮説が正しいときに, 帰無仮説を棄却する確率) α を与えたも
とで,

$$P\left(\frac{l(\tilde{\theta})}{l(\hat{\theta})} < c\right) = \alpha$$

となるような c を求めることになる。

具体的な c の求め方は，具体例とともに後述する。

検定方法 2 (大標本検定): または， $n \rightarrow \infty$ のとき，

$$-2 \log \frac{l(\tilde{\theta})}{l(\hat{\theta})} = -2(\log l(\tilde{\theta}) - \log l(\hat{\theta})) \rightarrow \chi^2(G)$$

となる。 \Rightarrow この方法が簡単で使いやすい。

$\log l(\tilde{\theta})$ や $\log l(\hat{\theta})$ は計量ソフトの出力結果から得られる (具体例は後述)。

大標本 = n が大きい

このような尤度比を用いた検定を尤度比検定と呼ぶ。

検定方法 1 と検定方法 2 との関係： 検定方法 1 から，

$$\frac{l(\tilde{\theta})}{l(\hat{\theta})} < c$$

を書き換えて，

$$\log \frac{l(\tilde{\theta})}{l(\hat{\theta})} < \log c$$

となり，さらに，

$$-2 \log \frac{l(\tilde{\theta})}{l(\hat{\theta})} > -2 \log c$$

となるので，有意水準 α を与えたもとで， $-2 \log c \approx \chi_{\alpha}^2(G)$ と近似していることになる。

ただし, $\chi_{\alpha}^2(G)$ は, 自由度 G のカイ二乗分布の $100 \times \alpha$ % 点の値を表し, カイ二乗分布表から得られる。

例 1: 正規母集団 $N(\mu, \sigma^2)$ からの標本値 x_1, x_2, \dots, x_n を用いて, σ^2 が既知のとき, 帰無仮説 $H_0: \mu = \mu_0$, 対立仮説 $H_1: \mu \neq \mu_0$ の尤度比検定を行う。

σ^2 が既知のとき, 尤度関数 $l(\mu)$ は,

$$l(\mu) = \prod_{i=1}^n f(x_i; \mu) = \prod_{i=1}^n (2\pi\sigma^2)^{-\frac{1}{2}} \exp\left(-\frac{1}{2\sigma^2}(x_i - \mu)^2\right) = (2\pi\sigma^2)^{-\frac{n}{2}} \exp\left(-\frac{1}{2\sigma^2} \sum_{i=1}^n (x_i - \mu)^2\right)$$

となる。

$l(\mu)$ を最大にする μ と $\log l(\mu)$ を最大にする μ は同じになる。

σ^2 が既知のとき , 対数尤度関数 $\log l(\mu)$ は ,

$$\log l(\mu) = -\frac{n}{2} \log(2\pi\sigma^2) - \frac{1}{2\sigma^2} \sum_{i=1}^n (x_i - \mu)^2$$

となる。

$$\frac{\mathbf{d} \log l(\mu)}{\mathbf{d}\mu} = 0$$

を μ について解いて , μ の最尤推定量は ,

$$\hat{\mu} = \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n X_i \equiv \bar{X}$$

となる。

検定方法 1: $H_0: \mu = \mu_0$ の制約付きの尤度関数は $l(\mu_0)$, μ を推定した制約なしの尤度関数は $l(\bar{X})$ となる。

尤度比検定統計量は,

$$\frac{l(\mu_0)}{l(\bar{X})} = \frac{(2\pi\sigma^2)^{-\frac{n}{2}} \exp\left(-\frac{1}{2\sigma^2} \sum_{i=1}^n (X_i - \mu_0)^2\right)}{(2\pi\sigma^2)^{-\frac{n}{2}} \exp\left(-\frac{1}{2\sigma^2} \sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2\right)} = \exp\left(-\frac{1}{2} \frac{(\bar{X} - \mu_0)^2}{\sigma^2/n}\right) < c$$

となる c を求める。

2つ目の等式は，

$$\begin{aligned} & \frac{\exp\left(-\frac{1}{2\sigma^2} \sum_{i=1}^n (X_i - \mu_0)^2\right)}{\exp\left(-\frac{1}{2\sigma^2} \sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2\right)} \\ &= \exp\left(-\frac{1}{2\sigma^2} \sum_{i=1}^n (X_i - \mu_0)^2 + \frac{1}{2\sigma^2} \sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2\right) \\ &= \exp\left(-\frac{1}{2\sigma^2} \left(\sum_{i=1}^n (X_i - \mu_0)^2 - \sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2\right)\right) \\ &= \exp\left(-\frac{1}{2\sigma^2} \left(\sum_{i=1}^n X_i^2 - 2\mu_0 \sum_{i=1}^n X_i + n\mu_0^2\right) - \left(\sum_{i=1}^n X_i^2 - 2\bar{X} \sum_{i=1}^n X_i + n\bar{X}^2\right)\right) \\ &= \exp\left(-\frac{1}{2\sigma^2} n(\bar{X}^2 - 2\mu_0\bar{X} + \mu_0^2)\right) = \exp\left(-\frac{(\bar{X} - \mu_0)^2}{2\sigma^2/n}\right) \end{aligned}$$

と計算される。

H_0 が正しいときに, $\frac{\bar{X} - \mu_0}{\sigma/\sqrt{n}} \sim N(0, 1)$ となるので,

$$P\left(\left|\frac{\bar{X} - \mu_0}{\sigma/\sqrt{n}}\right| > z_{\alpha/2}\right) = \alpha$$

となる。

$z_{\alpha/2}$ は標準正規分布の上から $100 \times \alpha/2$ % 点の値を表す。

$\alpha = 0.05$ のとき $z_{0.025} = 1.9600$, $\alpha = 0.01$ のとき $z_{0.005} = 2.5758$ となる。

書き換えると,

$$P\left(\left(\frac{\bar{X} - \mu_0}{\sigma/\sqrt{n}}\right)^2 > z_{\alpha/2}^2\right) = \alpha$$

となり，さらに，

$$P\left(-\frac{1}{2}\frac{(\bar{X}-\mu_0)^2}{\sigma^2/n} < -\frac{1}{2}z_{\alpha/2}^2\right) = \alpha$$

となり，

$$P\left(\exp\left(-\frac{1}{2}\frac{(\bar{X}-\mu_0)^2}{\sigma^2/n}\right) < \exp\left(-\frac{1}{2}z_{\alpha/2}^2\right)\right) = \alpha$$

と変形できる。

したがって，

$$c = \exp\left(-\frac{1}{2}z_{\alpha/2}^2\right)$$

とすればよい。

$\alpha = 0.05$ のとき , $z_{0.025} = 1.9600$ なので $c = 0.14649$

$\alpha = 0.01$ のとき , $z_{0.005} = 2.5758$ なので $c = 0.03625$

この方法は , 検定の度に c を計算しなければならず面倒 !!

データ数 n が多い時には次の方法が有効

検定方法 2 : 尤度比検定統計量は ,

$$-2 \log \frac{l(\mu_0)}{l(\bar{X})} = \frac{(\bar{X} - \mu_0)^2}{\sigma^2/n} \rightarrow \chi^2(G)$$

制約の数は $H_0 : \mu = \mu_0$ の 1 つで , $G = 1$ となる。

この場合は , 正確に , $\frac{(\bar{X} - \mu_0)^2}{\sigma^2/n} \sim \chi^2(1)$ となる。

$\chi^2(1)$ 分布の上側 **100** $\alpha\%$ 点を $\chi_\alpha^2(1)$ とするとき，確率変数 \bar{X} をその実績値 \bar{x} で置き換えて，

$$\frac{(\bar{x} - \mu_0)^2}{\sigma^2/n} > \chi_\alpha^2(1)$$

のとき，有意水準 α で $H_0: \mu = \mu_0$ を棄却する。

$\alpha = 0.05$ のとき $\chi_{0.05}^2(1) = 3.84$ ， $\alpha = 0.01$ のとき $\chi_{0.01}^2(1) = 6.63$ である。

(*) 標準正規分布の二乗 = 自由度 **1** のカイ二乗分布

$$\chi_{0.05}^2(1) = 1.9600^2 = 3.8416, \chi_{0.01}^2(1) = 2.5758^2 = 6.6347$$

例2: X_1, X_2, \dots, X_n は互いに独立で, それぞれパラメータ p を持ったベルヌイ分布に従うものとする。すなわち, X_i の確率関数は,

$$f(x; p) = p^x(1 - p)^{1-x} \quad x = 0, 1$$

となる。

このとき尤度関数は,

$$l(p) = \prod_{i=1}^n f(x_i; p) = \prod_{i=1}^n p^{x_i}(1 - p)^{1-x_i}$$

となる。

p の最尤推定値 \hat{p} は ,

$$\hat{p} = \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n x_i$$

である。

データ x_1, x_2, \dots, x_n をその確率変数 X_1, X_2, \dots, X_n で置き換えて, p の最尤推定量 \hat{p} は ,

$$\hat{p} = \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n X_i$$

となる。

次の仮説検定を考える。

$$H_0 : p = p_0 \qquad H_1 : p \neq p_0$$

制約数は1つ。(G = 1)

尤度比は,

$$\frac{l(p_0)}{l(\hat{p})} = \frac{\prod_{i=1}^n p_0^{X_i} (1 - p_0)^{1-X_i}}{\prod_{i=1}^n \hat{p}^{X_i} (1 - \hat{p})^{1-X_i}}$$

したがって, $n \rightarrow \infty$ のとき,

$$-2 \log \frac{l(p_0)}{l(\hat{p})} = -2 \log \frac{p_0}{\hat{p}} \times \sum_{i=1}^n X_i - 2 \log \frac{1-p_0}{1-\hat{p}} \times \sum_{i=1}^n (1 - X_i) \rightarrow \chi^2(1)$$

$\chi^2(1)$ 分布の上側 $100 \alpha\%$ 点を $\chi_\alpha^2(1)$ とするとき ,

$$-2 \log \frac{l(p_0)}{l(\hat{p})} > \chi_\alpha^2(1)$$

のとき , 帰無仮説 $H_0 : p = p_0$ を棄却する。

例 3 : 回帰モデル

$$Y_i = \beta_1 X_{1i} + \beta_2 X_{2i} + \cdots + \beta_k X_{ki} + u_i$$

$$u_i \sim N(0, \sigma^2) \quad i = 1, 2, \dots, n$$

について , $\beta_1, \beta_2, \dots, \beta_k$ に関する仮説の尤度比検定を行う。

例えば,

$$H_0 : \beta_1 = 0$$

$$H_0 : \beta_1 + \beta_2 = 1$$

$$H_0 : \beta_1 = \beta_2 = \beta_3 = 0$$

などのような仮説検定

$$\theta = \begin{pmatrix} \beta_1 \\ \vdots \\ \beta_k \\ \sigma^2 \end{pmatrix} \text{とする。}$$

尤度関数は，

$$\begin{aligned}l(\theta) &= \prod_{i=1}^n f(Y_i; \theta) \\ &= (2\pi\sigma^2)^{-\frac{n}{2}} \exp\left(-\frac{1}{2\sigma^2} \sum_{i=1}^n (Y_i - \beta_1 X_{1i} - \cdots - \beta_k X_{ki})^2\right)\end{aligned}$$

となる。

H_0 の制約つき最尤推定量を $\tilde{\theta} = (\tilde{\beta}_1, \dots, \tilde{\beta}_k, \tilde{\sigma}^2)$ とする。この仮設に含まれる制約数を G とする。

制約なし最尤推定量を $\hat{\theta} = (\hat{\beta}_1, \dots, \hat{\beta}_k, \hat{\sigma}^2)$ とする。

尤度比

$$\begin{aligned}
 \frac{l(\tilde{\theta})}{l(\hat{\theta})} &= \frac{(2\pi\tilde{\sigma}^2)^{-\frac{n}{2}} \exp\left(-\frac{1}{2\tilde{\sigma}^2} \sum_{i=1}^n (Y_i - \tilde{\beta}_1 X_{1i} - \cdots - \tilde{\beta}_k X_{ki})^2\right)}{(2\pi\hat{\sigma}^2)^{-\frac{n}{2}} \exp\left(-\frac{1}{2\hat{\sigma}^2} \sum_{i=1}^n (Y_i - \hat{\beta}_1 X_{1i} - \cdots - \hat{\beta}_k X_{ki})^2\right)} \\
 &= \frac{(\tilde{\sigma}^2)^{-\frac{n}{2}} \exp\left(-\frac{n}{2}\right)}{(\hat{\sigma}^2)^{-\frac{n}{2}} \exp\left(-\frac{n}{2}\right)} = \left(\frac{\frac{1}{n} \sum_{i=1}^n \tilde{u}_i^2}{\frac{1}{n} \sum_{i=1}^n \hat{u}_i^2}\right)^{-n/2} = \left(\frac{\sum_{i=1}^n \tilde{u}_i^2}{\sum_{i=1}^n \hat{u}_i^2}\right)^{-n/2} = \left(1 + \frac{\sum_{i=1}^n \tilde{u}_i^2 - \sum_{i=1}^n \hat{u}_i^2}{\sum_{i=1}^n \hat{u}_i^2}\right)^{-n/2} \\
 &= \left(1 + \frac{G}{n-k} \times \frac{(\sum_{i=1}^n \tilde{u}_i^2 - \sum_{i=1}^n \hat{u}_i^2)/G}{\sum_{i=1}^n \hat{u}_i^2/(n-k)}\right)^{-n/2} < c
 \end{aligned}$$

のとき仮説を棄却する。

$$\frac{(\sum_{i=1}^n \tilde{u}_i^2 - \sum_{i=1}^n \hat{u}_i^2)/G}{\sum_{i=1}^n \hat{u}_i^2/(n-k)} \sim F(G, n-k)$$

を利用すると c が求まる。

自由度 $(G, n - k)$ の F 分布の上から $100 \times \alpha \%$ 点の値を $F_\alpha(G, n - k)$ とする。

$$\frac{(\sum_{i=1}^n \tilde{u}_i^2 - \sum_{i=1}^n \hat{u}_i^2)/G}{\sum_{i=1}^n \hat{u}_i^2/(n - k)} > F_\alpha(G, n - k)$$

のとき仮説を棄却する。以下のように書き換える。

$$1 + \frac{G}{n - k} \times \frac{(\sum_{i=1}^n \tilde{u}_i^2 - \sum_{i=1}^n \hat{u}_i^2)/G}{\sum_{i=1}^n \hat{u}_i^2/(n - k)} > 1 + \frac{G}{n - k} \times F_\alpha(G, n - k)$$

$$\left(1 + \frac{G}{n - k} \times \frac{(\sum_{i=1}^n \tilde{u}_i^2 - \sum_{i=1}^n \hat{u}_i^2)/G}{\sum_{i=1}^n \hat{u}_i^2/(n - k)}\right)^{-n/2} < \left(1 + \frac{G}{n - k} \times F_\alpha(G, n - k)\right)^{-n/2}$$

となるので, $c = \left(1 + \frac{G}{n - k} \times F_\alpha(G, n - k)\right)^{-n/2}$ となる。

ただし，途中で以下を利用

$$\begin{aligned}\bar{\sigma}^2 &= \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n (Y_i - \bar{\beta}_1 X_{1i} - \cdots - \bar{\beta}_k X_{ki})^2 = \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n \bar{u}_i^2 \\ \hat{\sigma}^2 &= \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n (Y_i - \hat{\beta}_1 X_{1i} - \cdots - \hat{\beta}_k X_{ki})^2 = \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n \hat{u}_i^2\end{aligned}$$

$\bar{\sigma}^2$ は σ^2 の制約付き最尤推定量， $\hat{\sigma}^2$ は σ^2 の制約なし最尤推定量である。

近似的には，

$$-2 \log \frac{l(\bar{\theta})}{l(\hat{\theta})} = -2 \log \frac{(\bar{\sigma}^2)^{-\frac{n}{2}} \exp\left(-\frac{n}{2}\right)}{(\hat{\sigma}^2)^{-\frac{n}{2}} \exp\left(-\frac{n}{2}\right)} = n \log\left(\frac{\bar{\sigma}^2}{\hat{\sigma}^2}\right) \rightarrow \chi^2(G)$$

となる。